

国際商業都市としてのイズミルの発展 －生糸貿易路の変遷を中心に－

吉田 瑠美

エーゲ海沿岸の都市イズミルは、現在、人口でイスタンブール、アンカラに次ぐトルコ第三の都市として存在する。このイズミルは9世紀、エーゲ海と地中海地域において重要な港市となったものの、9世紀後期から17世紀までは、主に西アナトリアの生産物を輸出する小規模な港市に過ぎなかった。しかし1620年代からアナトリアとイランで消費されるヨーロッパの商品の輸入港となり、またアナトリアとイランの商品をヨーロッパ人商人に供給する重要な国際貿易港として台頭し、コスモポリタンの気質を持つ国際商業都市として発展していくこととなった。

本論文では当時のレヴァント貿易¹⁾の主要な商品であった生糸がイズミルに運ばれて来るようになったことで、イズミルが国際商業都市として台頭し、また多くの商人を引きつけて、コスモポリタンの都市として繁栄していったことを考察している。本論文においては、第一章で生糸がオスマン帝国とヨーロッパ諸国にどれほどの重要性を持っていたということと、そしてその生糸を大量に輸入していたヨーロッパ諸国のレヴァント貿易の変遷を考察していく。第二章では、ヨーロッパへの輸出のために主にアレppoへと運ばれていたイラン産の生糸がイズミルにも運搬されたこととその要因を考察し、実際にイランからの内陸貿易路を独占していたアルメニア人の活動を考察する。第三章では、国際商業

都市として台頭し、発展したイズミルの様子と、そこでのヨーロッパ人商人を含めた非ムスリムの働きを考察し、彼らが都市市民として都市形成の一翼を担ったことを明らかにしている。

16世紀からヨーロッパ諸国は、重商主義政策をとり、自国の産業を発展させ、レヴァント貿易を活性化させていた。13世紀の中頃からすでにイタリアの諸都市で発展していた絹織物業は、16世紀から重商主義政策のもとでフランスやイギリスでも発展した。これらの絹織物に主に使用されたのは、イランのカスピ海南岸地方で生産される生糸であった。17世紀には、ヨーロッパでの需要の増加にともない、イラン産の生糸は、レヴァント貿易の主要な輸出品としての立場を確立することとなった。このイラン産の生糸の輸入に対して、ヨーロッパが輸出したのが、重商主義政策のもとで増産された毛織物であり、レヴァント市場は、18世紀に至るまで毛織物の安定した販路であり続けた。17世紀以降イギリス、フランス、オランダは、自国の産業の発展をバネに、それまでレヴァント貿易でもっとも活発に活動していたヴェネツィアに取って代わり、互いに競合しながら、このレヴァント貿易を発展させていったのである。

まず17世紀初期にレヴァント貿易におけるヴェネツィアの優位性を切り崩したのは、フランスであった。フランスは西ヨーロッパ諸

国の中ではいち早く獲得したキャピチュレーションを足掛かりに、レヴァントでの貿易を活性化させることに成功した。次にそのフランスに代わって、レヴァント貿易において優位に立ったのがイギリスであった。イギリスでは、国王から貿易の独占権を与えられたレヴァント会社が設立され、組織的にレヴァント貿易を営み、18世紀中頃に再び貿易を活性化させたフランスに取って代わられるまで、レヴァント貿易において優位を保ち続けた。オランダの行ったレヴァント貿易の規模は、イギリスと比較すると小さいものであるが、イズミルにおいては貿易を活発に行っており、特にフランスの停滞期には、イギリスとともに活発に貿易を行っていた。

17世紀初期まで、ヨーロッパにイラン産の生糸を輸出し、またヨーロッパから毛織物などを輸入していたのは、古くからインド洋と地中海を結び、胡椒などをはじめとした奢侈品の貿易によって栄えていた、シリア北西部の都市、アレppoであった。特にオスマン帝国がシリアとエジプトをその支配下においてからは、イランからアレppoへの貿易路の安全性が向上し、大量の生糸が運ばれてくるようになり、アレppoは生糸の中継貿易地として栄えることとなった。しかし17世紀初期からのオスマン帝国とサファヴィー朝とのバグダッドをめぐる戦いは、イランからアレppoへの貿易路の治安を悪化させた。その結果、イランからのキャラヴァンは、生糸をアレppoに代わってイズミルに運搬するようになる。タブリーズ、エリヴァン、カルス、エルズルム、トカット、アンカラ、アフイヨン、イズミルと続くこの貿易路によってイラン産の生糸が運ばれてくるようになったのである。そして1627年から徐々にアレppoへと生糸が再び供給されるようになった後も、このイラン

からイズミルへと続く貿易路は衰退することなく、むしろより頻繁に活用されるようになっていった。

イラン産の生糸がアレppoへと再び供給されるようになった1630年代以降も、イランからイズミルへの貿易路が衰退することなく、むしろ頻繁に活用され、イズミルへと生糸が運び続けられた理由として、少なくとも次の3つの理由を挙げるができる。

まずイランからアレppoへの貿易路よりも、イランからイズミル貿易路で課せられた通行税の方が安かったことがあげられる。もうひとつの理由として、アレppoに蔓延していた役人の腐敗をあげることができる。イズミルは、19世紀の後半に行政改革が行われるまで、地方行政の中心地になることなく、地方行政区分のなかでも一番規模の小さい郡の中心でしかなかった。またイズミルは、アレppoよりもイスタンブールに近く、イスタンブールの中央政府の監視も届いていた。そのためイズミルでは、アレppoのような大規模な役人の腐敗が蔓延することがなかった。イランからイズミルへと生糸が運搬され続けた最後の理由として、イズミルでは、17世紀後半になるまでオスマン政府による貿易の管理体制が整っておらず、ヨーロッパ人商人が容易に脱税を行うことができたことがあげられる。このように17世紀以降、イズミルがアレppoの生糸の中継貿易地としての地位を切り崩し、生糸の中継貿易地として活躍するようになったのは、アレppoと比較して安価に商品のやりとりができる好条件が、イズミル備わっていたためだと考えることができる。結果、1670年頃には、年平均5隊ないし6隊のキャラヴァンが、イランで生産される2万2000梱（198万キログラム）の生糸のうち3000梱（2万7000キログラム）をイズミルに運び込んで

きていた。

またこれらの生糸を実際にイランからイズミルへキャラヴァンによって運搬していたのは、アルメニア商人であった。このアルメニア人が生糸の貿易を独占するようになったのは、サファヴィー朝のシャーであるアッバース大帝（在位1587-1629）の治世からである。アッバース大帝は、オスマン帝国との戦いでアルメニア人が多く居住するアナトリア北東部が戦場となった時、彼らの持つ広範囲な商業ネットワークを新首都イスファハーンに利用しようと考え、彼らの新首都イスファハーンへの強制移住を決定した。アッバース大帝はイスファハーンに強制移住させたアルメニア人に生糸の独占輸出権を与えるなどの優遇処置をとり、生糸貿易の発展を図った。アッバース大帝の治世に生糸の貿易を独占的に行うようになったアルメニア人は、アッバース大帝の死後もその独占を維持し、各地に広がる独自の商業ネットワークを利用して、生糸を各地に運搬していった。17世紀初期からイズミルに運ばれて来るようになったイラン産の生糸も、このアルメニア商人によって独占的に運搬されたものである。

17世紀初期からアルメニア商人によって、当時のレヴァント貿易の主要商品であった生糸がイズミルに運ばれて来るようになったことで、それまで地方の小規模な港市であったイズミルは、急速に国際商業都市として発展していった。イズミルに生糸が運ばれるようになった17世紀初期頃から、イズミルに集荷される生糸をはじめとした商品を獲得するために、続々と同市にヨーロッパ諸国の領事館が建設されている。ヨーロッパ諸国の領事館と彼らの邸宅は、「フランク通り」と呼ばれる、イズミルの海岸に面した通りに設けられた。この「フランク通り」は、ヨーロッパ人

の居留地となるだけでなく、イズミルの商業の中心地となっていった。イズミルに居住したヨーロッパ人は、確かに非ムスリムとして、また外国人として、いくつかの行動の規制を受けていたが、他のレヴァントの都市の居留地に居住したヨーロッパ人と比較して、政府の干渉を受けることが少なく、その自由を謳歌していた。

イズミルが17世紀初頭から国際貿易を活性化させるにつれて、ムスリム、非ムスリムを問わず、多くの人々がオスマン帝国各地からイズミルに移住してくるようになった。イズミルにおけるユダヤ人、アルメニア人、ギリシア人、ムスリム・トルコ人は、それぞれの居住区を持ち、それぞれのコミュニティーを形成していた。イズミルの人口面での多数派は、ムスリム・トルコ人であったが、彼らは国際貿易に積極的に従事することがなかった。ムスリム・トルコ人とヨーロッパ人との間には、言語だけでなく宗教的な隔たりが存在しており、これらの隔たりがムスリム・トルコ人の国際貿易に従事する意欲をそいだと考えることができる。ムスリム・トルコ人とヨーロッパ人との隔たりを補い、彼らの仲介者となったのは、ユダヤ人、アルメニア人、ギリシア人といったズインミー、すなわち非ムスリムのオスマン臣民たちであった。特に多くのユダヤ人がイズミルの関税徴税官の役職を独占するだけでなく、ヨーロッパ人商人の代理人として、また仲買人としても活躍しており、まさにムスリム社会とヨーロッパ社会を結びつける役割を果たしていた。アルメニア人もイラン産の生糸の運搬を独占するだけでなく、その貿易にも深く従事していた。ギリシア人は、当時はまだユダヤ人やアルメニア人ほど国際貿易に対して、影響力を持っていなかった。しかしおもに居酒屋や酒場の経営

者や船乗りとして、直接的に国際貿易に関わる機会には少なかったものの、イズミルでの国際貿易になくなくてはならない存在であった。イズミルに居住した非ムスリムは、このように各コミュニティに分化していたが、その構成員は常にそのコミュニティ全体の発展を目的に活動していたわけではなかった。確かに各コミュニティは、宗教や言語などによって強い絆を保ち、それを貿易活動に利用していた。しかしイズミルにおいては、商人たちは個人的利益の追求のために、その絆を断ち切り、他のコミュニティと結びつくことも珍しくなかった。自身の属するコミュニティと対立しても、自身の利益を追求しようとした商人たちの貪欲さが、イズミルを短期間にレヴァント随一の国際商業都市に成長させる原動力になったと考えることができる。

このようにイズミルは、17世紀初期から多様な人々を受け入れ、国際商業都市として発展した。しかしその発展に対して、イズミルの都市インフラが整備されたのは、17世紀後半からであった。イズミルの商業の中心地に居住区を構え、貿易を活発に行っていたヨーロッパ人は、実際の所、あまりイズミルのインフラの整備に関心を寄せていなかった。彼らは、キャピチュレーションによって、領事館や住宅、教会以外の都市の建築物に投資を行うことを禁止されていたからである。少なくともこの時期のインフラの不整備は、ヨーロッパ人のフランク通りでの貿易活動に影響を与えることがなかった。逆に彼らは、イズミル湾への商船の出入りを監視する城塞がないことを良いことに、容易に脱税を行っており、17世紀後期までのイズミルにおけるインフラの不整備は、彼らの活動に有利に働いていたのである。

しかし17世紀後半に入り、イズミルの国際

商業都市としての発展を認識したオスマン帝国は、ようやくこのイズミルに関心を向けるようになった。まずイズミルで堂々で行われていた脱税を取り締まる為に、イズミル湾の商船の出入りを監視することのできる城塞を建設した。そしてオスマン帝国の政府からの出費ではないが、オスマン帝国の大宰相であったキュプルル・ファズイル・アフメット・パシャ（在任1661-1676）の個人的な出費によって、新たな税関が建設された。これらが建設されたことで、ヨーロッパ人商人の脱税をようやく取り締まることができるようになった。オスマン帝国の無干渉の下で、担税を逃れ、大いに貿易を行っていたヨーロッパ人商人にとって、城塞と新たな税関の建設は、都合の悪いものであった事は事実である。しかし結果的には、オスマン帝国とその大宰相によって整備されたこの時代の都市インフラは、ヨーロッパ人も含む、イズミルに居住する全ての人々にとって有益なものとなった。城塞の設置によって、イズミル湾と都市の安全が保障され、海賊などに煩わされることなく、イズミルは安全に貿易を行うことができるようになったからである。またこの時代には、大規模な商業施設も建設されており、それらの施設はイズミルの国際商業都市としての発展に大きく貢献し、結果的には、ヨーロッパ人にも膨大な利益をもたらしたのである。

しかしせっかく整備されたイズミルの都市インフラは、1688年に発生した地震とその後の火災によって、その殆どが崩れ去ってしまった。第二次ウィーン包囲の失敗によって財政難にあった中央政府には、イズミルの都市インフラの再建に投資する財政的余力はなかった。またイズミルの有力者もこの地震によって、財力をそがれていた。このイズミル

を再建したのは、引き続きイズミルで貿易を行っていくと決断したイズミルに居住するヨーロッパ人のコミュニティーであった。17世紀前期には都市のインフラの整備に関心を寄せていなかったヨーロッパ人商人は、地震の後には、その貿易を復活させるために貿易インフラの再建に積極的に関わっていった。彼らは、領事館や邸宅、教会だけを再建するのではなく、キャピチュレーションによって投資が禁止されていたハーン（隊商宿）やベデステン（高級織物商人や金融商人、政府の財務局が店や金庫を持つ堅固な施設）といった貿易インフラへもオスマン臣民との共同出資という形で投資を行った。彼らの活躍の甲斐があり、イズミルは地震後すぐに復興を果たし、その貿易は以前にも増して活発なものとなり、イズミルはさらに繁栄した国際商業都市となっていったのである。

本論文では、17世紀にレヴァント貿易の主要な商品であった生糸がイズミルに引きつけられたことで、イズミルが国際商業都市として発展していき、また多くの商人を引きつけ、コスモポリタンの都市として繁栄していったことを考察してきた。イズミルの国際商業都市としての発展を考察する上で、ヨーロッパ人商人の果たした役割は非常に重要である。彼らはイズミルでの貿易を行うためにこの都市に滞在していたが、イズミルの商業の中心地にその居住区を構え、イズミルでの商業活動を活発化させるだけでなく、後にイズミルのインフラ整備にも関与していくようになり、イズミルの都市形成に密接に関わっていた。彼らは外国人としてイズミルに滞在したものの、まるでイズミルの市民の一員であるかのように、イズミルの都市形成に密接に関係していたのである。これらのヨーロッパ人、そしてムスリム・トルコ人、彼らの橋渡

しを行っていたオスマン臣民であるユダヤ人、アルメニア人、ギリシア人が、時には利害を一致させて協力し合い、時には利害を対立させて対立しながら、発展させていったのがイズミルという港市であったと考える。

本論文で考察した17世紀の後もイズミルは発展を続け、18世紀からはイズミルはその肥沃な後背地で生産される綿花をはじめとした第一次産品を集積し、ヨーロッパへ輸出する国際貿易港としてさらなる発展を遂げていった。そして19世紀中頃からイズミルの後背地は、ヨーロッパへの工業用原料の供給地として特化されていき、イズミルとその後背地は、ヨーロッパで確立した資本主義的世界経済に組み込まれることとなった。本論文で考察した17世紀のイズミルは、イラン産の生糸を主にヨーロッパへと輸出しており、対ヨーロッパ貿易を活発に行ったもののまだまだ、不等価交換といったヨーロッパに従属するような貿易は行っていなかった。しかし本論文において、イズミルの都市形成の過程を見ていくと、この都市がヨーロッパ人商人と彼らの行った貿易を中心に形成されていったことが見えてくる。特に、ヨーロッパの軍事的優位が明らかとなった第二次ウィーン包囲の数年後に発生したイズミルの地震後の復興は、オスマン臣民との共同出資という形をとったものの、ヨーロッパ人商人が主体となって行ったものであった。このように、この時代のイズミルの都市形成の過程を考察すると、すでにヨーロッパ人商人が主体となった都市が形成されており、イズミルが資本主義的世界経済へと組み込まれるための種は、もうすでにこの時期に蒔かれていたのではないかと推察されるのである。イズミルの発展を考察するうえで、この資本主義的世界経済との関わりを考察することは、19世紀の末には、イズ

ミルがヨーロッパとの不等価交換を行う植民地的な貿易港となっていたことから重要である。しかしこれらの問題は今後の課題とし、本論文では、すでに17世紀のイズミルにおいてその資本主義的な世界経済へと組み込まれるための下地が出来つつあったのではないかと推測するに留めたい。

注

- 1) レヴァントとは、ギリシアからエジプトに亘る、東地中海沿岸地方の名称である。レヴァント地方に含まれるアナトリアからシリア、パレスチナ、エジプトにかけては多くの港市が存在しており、ヨーロッパ諸国がこれらの港市で行った貿易を「レヴァント貿易」と呼んでいる。